

それでは『北斎漫画』所載の図からいくつか紹介しましょう。

まずは、代表的なジャンルである江戸風俗。士農工商、公家に芸人、力士など、その描写対象は枚挙にいとまがないのがこのジャンルですが、『北斎漫画』といえはやはりこの「(仮称)どじょうすくいおじさん」(挿図⑤)でしょう。この手の展覧会のポスターやチラシには必ず登場するおじさんです。しかし、ヨーロッパ人はこのおじさんをご思ったのでしょうか。ちなみに筆者の友人のE君がドイツ人の前でこの顔と同じ顔をしたら、露骨にいやな顔をされました。



挿図⑤「北斎漫画」十編より



挿図⑥「北斎漫画」三編より

また、ページ全体を使って踊りの様々な仕草を描いた「雀踊り」(挿図⑥)という図があります。連続した動作を書き連ねたこの図はアニメの原型である「パラパラ漫画」の、さらにその原型だと言えるかもしれませぬ。槍術とか速捕術などのパラパラ描写もあります。

風俗と並んで楽しいのが動物や植物の図です。犬やネズミなど、江戸の人にも身近な動物から龍や河童などの想像上の動物もあり、また、ワニとかゾウとか、はたして北斎が実際に目にしたのかわからない動物まで描いています。実物と比較して「？」のものもあります。まずけど、その特徴を誇張したり、どこなくユーモラスであったり、なにか物悲しゅうだったり、なんとも憎めない動物描写です。

ところでこの『北斎漫画』ですが、はじめ名古屋の永楽屋という版元から出版されたときは、北斎自身も版元も一編で完結のつもりだったようですが、思いのほかの好評と、江戸の版元・角丸屋などの協力もあって、はじめは十編、のち二十編シリーズとする予定にまでなりました。しかし、北

斎の生前に刊行されたのは十二編までで、十三、十四編は北斎の死の直後に刊行されました。それで十五編で完結となったのですが、実際に最後の十五編が刊行されたのはなんと北斎の死の二十九年後、一八七八(明治十一年)のことです。

江戸時代の書籍は木版によって摺られて出版されまし

た。その版は板、すなわち版木ですが、その版木の所有権は版元にあり、通常錦絵など浮世絵の版木はよほど売れ行き好調だったり、特別な事情がない限り、カンナで削られて新作用の版木として再利用されます。書籍の場合も、版元がさらに摺り増ししようとしないうり、同じ道をたどりました。実際に『北斎漫画』の版木の一部には、別の北斎の絵手本の版木の再利用であることが判明しているものがあります。

その『北斎漫画』の版木ですが、一八七八(明治十一年)の十五編刊行後、十数年は永楽屋が所持し、再摺もされていたようです。しかしその後明治四十年以前には、歴史書出版で有名な東京の吉川弘文館の所有となり、さらに一九一一年(明治四十四年)年に美術書出版で知られる京都の芸艸堂へ売却されました。その数、墨版(主版)に薄墨、肉色の三種類で合計七〇六枚にのぼります。今回の再摺にあたっての芸艸堂による詳細な調査によれば、版木には桜の木が使われ、その大きさはほとんどがタテ二十五センチ×ヨコ三十八〜四十二センチ、厚さが一・五センチくらい。なかには摩耗部分を直す再刻や虫喰いの補修、補強が見られるものがありました。ほとんどの版木は両面が使われています。今回、これらの伝承版木により百五十セットの再摺が行われました。

こうして伝えられた『北斎漫画』の版木ですが、再摺可能なのは今回限りではないか、と言われていいます。その主な理由は、版木の劣化ということも多少はありますが、ほかにもふたつあります。

ひとつは紙の問題です。劣化がすすんだ古い版木を摺るためには、版木に負担をかける上質な和紙が必要です。約八万枚という数が必要だった今回の再摺には高知県須崎の和紙が使われましたが、和紙製作技術者の高齢に伴う継承者問題をかかえています。



挿図⑦ 摺師の伊藤達也さん